

本所両国

芥川龍之介

青空文庫

「大溝」
おほどぶ

僕は本所界隈ほんじよかいわいのことをスケッチしろといふ社命を受け、同社の〇君と一しよに久振りひさしぶりに本所へ出かけて行つた。今その印象記を書くのに当り、本所両国ほんじよりやうごくと題したのは或は意味を成してゐないかも知れない。しかしなぜか両国は本所区のうちにあるものの、本所以外の土地の空気も漂つてただよゐることは確かである。そこで〇君とも相談の上、ちよつと電車の方向板はうかうばんじみた本所両国といふ題を用ひることにした。――

僕は生れてから二十歳頃までずっと本所ほんじよに住んでゐた者であ

る。明治二三十年代の本所は今日こんにちのやうな工業地ではない。江戸二百年の文明に疲れた生活上の落伍者らくごしやが比較的大勢住んでゐた町である。従つて何処どこを歩いてみても、日本橋や京橋のやうに大商店の並んだ往來わうらいなどはなかつた。若しその中に少しでも賑やかな通りを求めるとすれば、それは僅わずかに両国りやうごくからかめざわちやう亀沢町かめざわちやうに至る元町もとまち通りか、或は二の橋はしから亀沢町かめざわちやうに至る二つ目め通り位なものだつたであらう。勿論その外ほかに石原いしはら通りや法ほ恩寺橋ふおんじばし通りにも低い瓦屋根かはらやねの商店は軒のきを並べてゐたのに違ちがひない。しかし広い「お竹倉たけぐら」をはじめ、「伊達様だてさま」「津軽様つがるさま」などといふ大名屋敷はまだ確かに本所の上へ封建時代の影を投げかけてゐた。……

殊に僕の住んでゐたのは「お竹倉」に近い小泉町である。殊に僕の住んでゐたのは「お竹倉」に近い小泉町である。「お竹倉」は僕の中学時代にもう両国停車場や陸軍被服廠ひふくしやうに変つてしまつた。しかし僕の小学時代にはまだ「大溝」おほどぶに囲まれた、雑木林ざふきばやしや竹藪の多い封建時代の「お竹倉」だつた。「大溝」とはその名の示す通り、少くとも一間半あまりの溝のことである。この溝は僕の知つてゐる頃にはもう黒い泥水をどろりと淀よどませてゐるばかりだつた。（僕はそこへ金魚にやる子ぼうふら子を掬すくひに行つたことをきのふのやうに覚えてゐる。）しかし「御維新」ごゐしん以前には溝よりも堀に近かつたのであらう。僕の叔父をぢは十何歳かの時にも似合はない大小を差し、この溝の前にしやがんだまま、長い釣竿つりざををのばしてゐた。すると誰か叔父の刀にぴしりと鞘さや当て

をしかけた者があつた。叔父は勿論むつとして肩越しに相手を振り返つてみた。僕の一家一族の内にもこの叔父程負けぬ気の強かつた者はない。かういふ叔父はこの時にも相手によつては売られた喧嘩を買ふ位の勇氣は持つてゐたのであらう。が、相手は誰かと思ふと、朱鞞しゆぎやの大小を門くわんぬぎや差さしに差した身の丈拔群たけの侍さむらひだつた。しかも誰にも恐れられてゐた「新徴組しんちようぐみ」の一人ひとりに違ひなかつた。かれは叔父を尻目しりめにかけながら、にやにや笑つて歩いてゐた。叔父は彼を一目みたぎり、二度と長い釣竿の先から目をあげずにゐたとかいふことである。

僕は小学時代にも「大溝おほどぶ」の側を通る度にこの叔父をぢの話をを思ひ出した。叔父は「御維新」以前には新刀無念流しんたうむねんりうの劍客けんかくだつ

た。（叔父が安房上総へ武者修行に出かけ、二刀流の劍客と仕合をした話も矢張り僕を喜ばせたものである。）それから「御維新」前後には彰義隊しやうぎたいに加はる志を持つてゐた。最後に僕の知つてゐる頃には年とつた猫背ねこぜの測量技師だつた。「大溝」は今日の本所ほんじよにはない。叔父も亦大正またの末年ぼつねんに食道癌しよくだうがんを病んで死んでしまつた。本所の印象記の一節にかういふことを加へるのは或は私事に及び過ぎるであらう。しかし僕はO君と一しよに両国橋を渡りながら、大川おほかはの向うに立ち並んだ無数のバラツクを眺めた時には實際烈しい流転るてんの相さうに驚かない訣わけには行ゆかなかつた。僕の「大溝」を思ひ出したり、その又「大溝」に釣かをしてゐた叔父を思ひ出したりすることも必しも偶然ではないのである。

両国

両国りやうごくの鉄橋は震災前しんさいぜんと変らないといつても差支さしつかへない。唯鉄の欄干らんかんの一部はみすぼらしい木造に變つてゐた。この鉄橋の出来たのはまだ僕の小学時代である。しかし櫛形くしがたの鉄橋には懐古の情も起つて来ない。僕は昔の両国橋に——狭い木造の両国橋に——いまだに愛あいじやく惜やくを感じてゐる。それは僕の記憶によれば、今日こんにちよりも下流にかゝつてゐた。僕は時々この橋を渡り、浪なみの荒い「百本杭ひゃつほんぐひ」や苜あしの茂つた中洲なかつを眺めたりした。中洲に茂つた苜は勿論、「百本杭」も今は残つてゐない。「百本杭」もそ

の名の示す通り、河岸かしに近い水の中に何本も立つてゐた乱らんぐひ杭かで
 ある。昔の芝居は殺ころし場ばなどに多ただ田だの薬師やくしの石切場いしきりばと一しよに
 度々この人通りの少ない「百本杭」の河岸かしを使つてゐた。僕は夜
 は「百本杭」の河岸かしを歩いたかどうかは覚えてゐない。が、朝は
 何度もそこに群むらがる釣師つりしの連中を眺めに行つた。○君は僕のかう
 いふのを聞き、大川おほかはでも魚さかなの釣れたことに多少の驚嘆もを洩もらし
 てゐた。一度も釣竿つりざしを持つたことのない僕は「百本杭」で釣れた
 魚なの何なんと何なんだつたかを知つてゐない。しかし或夏の夜明けにこの
 河岸かしへ出かけてみると、いつも多い釣師つりしの連中ひとりは一人もそこに来
 てゐなかつた。その代りに杭あひだの間には坊主頭ぼうずの土左衛門どざゑもんが一人俯ひとりう
 向けつむに浪なみに揺ゆすられてゐた。……

りやうごくぼし たもと

両国橋の袂にある表忠碑も昔に変わらなかつた。表忠碑を書

いたのは日露役にちろえきの陸軍総司令官 大山巖おほやまいはほ侯爵である。日露役

の始まつたのは僕の中学へはひり立てだつた。明治二十五年に生

れた僕は勿論日清役のことを覚えてゐない。しかし北清事変ほくしんの

時には大平だいへいといふひろこうぢ小路（両国）の絵草紙屋ゑぞうしへ行き、石版せきばん

刷ずりの戦争の絵を時々一枚づつ買つたものである。それ等の絵に

は義和団ぎわだんの匪徒ひとや英吉利兵イギリスなどは斃たふれてゐても、日本兵は一人も

斃れてゐなかつた。僕はもうその時にも矢張り日本兵も一人位ひとりくらゐ

は死んでゐるのに違ひないと思つたりした。しかし日露役の起つ

た時には徹頭徹尾露西亞位ロシア悪い国はないと信じてゐた。僕のリア

リズムは年と共に発達する訣わけには行ゆかなかつたのであらう。もつ

ともそれは僕の知人なども出征してゐたためもあるかも知れない。この知人は南山なんざんの戦たたかひに鉄条網てつじょうもうにかかつて戦死してしまつた。

鉄条網といふ言葉は今こん日にちでは誰も知らない者はない。けれども日露役の起つた時には全然在来の辞書にない、新しい言葉の一つだつたのである。僕は大きい表忠碑を眺め、今更のやうに二十年前の日本ぜんを考へずにはゐられなかつた。同時に又ちよつと表忠碑にも時代錯誤に近いものを感じない訣わけには行ゆかなかつた。

この表忠碑うしろうの後には確か両りやう国こく劇場げきぢやうといふ芝居小屋の出来る筈になつてゐた。現に僕は震災前ぜんにも落成しない芝居小屋の煉れ瓦壁んぐわべいを見たことを覚えてゐる。けれども今は薄うすぎた汚きたない亜鉛トタン葺ぶきのバラツクの外ほかに何も芝居小屋らしいものは見えなかつた。も

つとも僕は両国の鉄橋に愛惜あいじやくを持つてゐないやうにこの煉れんぐ瓦建わだての芝居小屋にも格別の愛惜を持つてゐない。両国橋の木造だつた頃には駒止こまとめ橋ばしもこの辺に残つてゐた。のみならず井生村いぶむらろうろや二州楼にしゅうろうといふ料理屋も両国橋の両側に並んでゐた。その外ほかに鮓屋すしやの与平よへい、鰻屋うなぎやの須崎屋すさきや、牛肉ほかの外ほかにも冬になると猪ししや猿さるを食はせる豊田屋とよだや、それから回向院えかうゐんの表門に近い横町よこちやうにあつた「坊主軍鶏ぼうずしやも」——かう一々数へ立てて見ると、本所ほんじよでも名高い食物屋くひものやは大抵たいていこの界限かいわいに集つてゐたらしい。

「富士見の渡し」

僕等はりやうごくばし兩國橋の袂を左へ切れ、おほかは大川に沿つて歩いて行つた。「ひやつほんぐひ百本杭」のないことは前にも書いた通りである。しかし「だてさま伊達様」は残つてゐるかも知れない。僕はまだ幼稚園時代からこの「伊達様」の中にあるわれい和霊神社のお神楽をかくら見に行つたものである。なんでも母などの話によれば、女中の背中におぶさつたまま、熱心にお神楽をみてゐるうちに「うんこ」をしてしまつたこともあつたらしい。しかし何処どこを眺めても、トタンぶ亜鉛葺きのバラツクの外ほかに「伊達様」らしい屋敷は見えなかつた。「伊達様」の庭にはもくせい木犀が一本秋ごとに花を盛もつてゐたものである。僕はそのうすあま薄甘い匂ひを子供心にも愛してゐた。あの木犀も震災の時に勿論灰になつてしまつたことであらう。

流転るてんの相の僕を脅おびすのは「伊達様だてさま」の見えなかつたことばかりではない。僕は確かこの近所にあつた「富士見の渡しわた」を思ひ出した。が、渡し場らしい小屋は何処どこにも見えない。僕は丁度道ちやうどばたに芋いもを洗つてゐた三十前後の男に渡し場の有無うむをたづねて見ることにした。しかし彼は「富士見の渡し」といふ名前を知つてゐないのは勿論、渡し場のあつたことさへ知らないらしかつた。

「富士見の渡し」はこの河岸かしから「明治病院」の裏手に当る向う河岸がしへ通つてゐた。その又向う河岸は掘割りになり、そこに時々何処どこかの家の家鴨あひるなども泳いでゐたものである。僕は中学へはひつた後のちも或親戚を尋ねるために度々たびたび「富士見の渡し」を渡つて行つた。その親戚は三遊派さんゆうはの「五りん」とかいふもののお上かみさ

んだつた。僕の家へ何かの拍子に円朝の息子の出入りしたのでもかういふ親戚のあつたためであらう。僕は又その家の近所に今村次郎といふ標札を見付け、この名高い速記者（種々の講談の）に敬意を感じたことを覚えてゐる。――

僕は講談といふものを寄席では殆ど聞いたことはない。僕の知つてゐる講釈師は先代の邑井吉瓶だけである。（もつとも典山とか伯山とか或は又伯龍とかいふ新時代の芸術家を知らない訣ではない。）従つて僕は講談を知るために大抵今村次郎氏の速記本に依つた。しかし落語は家族達と一しよに相生町の広瀬だの米沢町（日本橋区）の立花家だのへ聞きに行つたものである。殊に度々行つたのは相生町の広瀬だ

つた。が、どういふ落語を聞いたかは生憎あいにくはつきりと覚えてゐない。唯よしだくにござろう吉田国五郎の人形芝居を見たことだけは未だいまにありありと覚えてゐる。しかも僕の見た人形芝居は大抵たいてい小幡小平次とかさねか累かさねとかいふ怪談物だつた。僕は近頃大阪へ行き、久振ひさしぶりに文楽ぶんらくを見物した。けれども今日こんにちの文楽は僕の昔見た人形芝居よりも軽業かるわざじみたけれんを使つてゐない。吉田国五郎の人形芝居は例へば清玄せいげんの庵室あんしつなどでも、血だらけな清玄の幽霊は大夫たいふの見台けんたいが二つに割れると、その中から姿を現はしたものである。寄席よせの広瀬も焼けてしまつたであらう。今村次郎氏も明治病院の裏手に——僕は正直に白状すれば、今村次郎氏の現存してゐるかどうかも知らないものひとりの一人である。

そのうちに僕は震災前と——といふよりも寧ろ二十年前と少しも変らないものを発見した。それは両国駅の引込み線を抑へた、三尺に足りない草土手である。僕は實際この草土手に「国亡びて山河在り」といふ詠嘆を感じずにはゐられなかつた。しかしこの小さい草土手にかういふ詠嘆を感じるのそれはそれ自身僕には情なかつた。

「お竹倉」

僕の知人は震災の爲めに何人もこの界限に斃れてゐる。僕の妻の親戚などは男女九人の家族中、やつと命を全うしたのは二十

前後の息子むすこだけだった。それも火の粉を防ぐために戸板をかざして立つてゐたのを旋風の為に捲まき上げられ、安田家の庭の池の側へ落ちてどうにか息を吹き返したのである。それから又僕の家へ毎日のやうに遊びに来た「お条でうさん」という人などは命だけは助かったものの、一時は発狂したのも同様だった。「お条さんは髪の毛の薄い為めに何処どこへも片付かずにある人だった。しかし髪の毛を生はやす為めに蝠かうもり蝠かうもりの血などを頭へ塗ぬつてゐた。」最後に僕の通かよつてゐた江東かうとう小学校の校長さんは両眼とも明めいを失つた上、前年にはたつた一人の息子を失ひ、震災の年には御夫婦とも焼け死んでしまつたとか言ふことだった。僕も本所ほんじよに住んでゐたとすれば、恐らくは矢張やはりこの界限かいがいに火事を避けてゐたこと

であらう。従つて又僕は勿論、僕の家族も彼等のやうに非業ひごふの最後を遂げてゐたかも知れない。僕は高い褐色の本所会館を眺めながら、こんなことを〇君と話し合つたりした。

「しかし 両国橋りやうごくぼしを渡つた人は大抵たいてい助かつてゐたのでせう？」

「両国橋を渡つた人はね。……それでも元町もとまち通りには高压線の

落ちたのに触ふれて死んだ人もあつたと言ふことですよ。」

「兎とに角東京かく中でも被服ひふく廠しやう程大勢おおぜい焼け死んだところはなかつたのでせう。」

かういふ種々の悲劇のあつたのはいづれも昔の「お竹倉たけぐら」の跡である。僕の知つてゐた頃の「お竹倉」は大体「御維新ごゐしん」前ぜんと変らなかつたものの、もう総武そうぶ鉄道会社の敷地うちの中に加へられて

ゐた。僕はこの鉄道会社の社長の次男の友達だつたから、妄みだりに人を入れなかつた「お竹倉」の中へも遊びに行つた。そこは前にも言つたやうに雑ざふ木林きはやしや竹藪のある、町まちなか中には珍めづらしい野原だつた。のみならず古い橋のかかつた掘割りさへ大おほ川かはに通じてゐた。僕は時々空氣銃を肩にし、その竹藪や雑木林の中に半日を暮らしたものである。溝どぶ板いたの上に育つた僕に自然の美しさを教へたものは何よりも先に「お竹倉」だつたであらう。僕は中学を卒業する前に英訳の「獵れ人じん日記につぎ」を拾ひ読みにしながら、何度も「お竹倉」の中の景色を——「とりかぶと」の花の咲いた藪の陰かげや大きい昼の月のかかつた雑木林の梢こすねを思ひ出したりした。「お竹倉」は勿論その頃には厳いしいかめ陸軍被服廠や両国駅に變つて

ゐた。けれども震災後の今日こんにちを思へば、——「卻かへつて并州へいしゅうを望めば是故郷これ」と支那人の歌つたのも偶然ではない。

総武鉄道そうぶの工事の始まつたのはまだ僕の小学時代だつたであらう。その以前の「お竹倉」は夜よるは「本所ほんじよの七不思議なな」を思ひ出さずにはゐられない程もの寂しかつたのに違ひない。夜は？——いや、昼間さへ僕は「お竹倉」の中を歩きながら、「おいてき堀」や「片葉かたはの芦あし」は何処どこかこのあたりにあるものと信じない訣わけには行ゆかなかつた。現に夜学かよに通ふ途中、「お竹倉」の向うに莫迦ぼか囉ばやしを聞き、てつきりあれは「狸たぬき囉ばやし」に違ひないと思つたことを覚えてゐる。それはおそらくは小学時代の僕一人ひとりの恐怖ではなかつたのであらう。なんでも総武鉄道の工事中にそこへ通かよつて

みた線路工夫の一人は宵闇の中に幽霊を見、氣絶してしまつたとかいふことだつた。

「大川端」

本所ほんじよ会館は震災前ぜんの安田家やすだけの跡に建つたのであらう。安田家は確か花崗石くわかうせきを使つたルネサンス式の建築だつた。僕は椎しひの木などの茂つた中にこの建築の立つてゐたのに明治時代そのものを感じてゐる。が、セセッション式の本所会館は「牛乳デー」とかいふものの為に植込みのある玄関の前に大きいポスタアを掲かかげたり、宣伝用の自動車を並べたりしてゐた。僕の水泳を習ひに行つ

た「日本游泳協会」は丁度この河岸にあつたものである。僕はいつか何かの本に三代將軍家光は水泳を習ひに日本橋へ出かけたと言ふことを発見し、滑稽に近い今昔の感を催さない訣には行かなかつた。しかし僕等の大川へ水泳を習ひに行つたと言ふことも後世には不可解に感じられるであらう。現に今でも〇君などは「この川でも泳いだりしたものですかね」と少からず驚嘆してゐた。

僕は又この河岸にも昔に変わらないものを発見した。それは——生憎何の木かはちよつと僕には見当もつかない。が、兎に角新芽を吹いた昔の並み木の一本である。僕の覚えてゐる柳の木は一本も今では残つてゐない。けれどもこの木だけは何かの拍子

に火事にも焼かれずに立つてゐるのであらう。僕は殆どこの木の幹に手を触れて見たい誘惑を感じた。のみならずその木の根元には子供を連れとお婆さんが二人曇天の大川を眺めながら、花見か何かにでも来てゐるやうに稲荷鮎を食べて話し合つてゐた。

本所会館の隣にあるのは建築中の同愛病院である。高い鉄の櫓だの、何階建かのコンクリートの壁だの、殊に砂利を運ぶ人夫だのは確かに僕を威圧するものだった。同時に又工業地になつた「本所の玄関」といふ感じを打ち込まなければ措かないものだった。僕は半裸体の工夫が一人、汗に体を輝かせながら、シヤベルを動かしてゐるのを見、本所全体もこの工夫のやうに烈しい生活をしてゐるのを感じた。この界限の家々の上に五月幟の翻つ

てゐたのは僕の小学時代の話である。今では、——誰も五月幟のぼりよりは新しい日本の年中行事になつたメイ・デイを思ひ出すのに違ひない。

僕は昔この辺にあつた「御蔵橋」と言ふ橋を渡り、度々たびたび友とも綱あづなの家の側にあつた或友達の家へ遊びに行つた。彼も亦また海軍の将校になつた後、二三年前ぜんに故人になつてゐる。しかし僕の思ひ出したのは必しも彼のことばかりではない。彼の住んでゐた家のあたり、——瓦屋根あひだの間に樹木じゆもくの見える横町よこちやうのことも思ひ出したのである。そこは僕の住んでゐた元町もとまち通りに比べると、はるかに人通りも少なければ「しもた家」も殆ど門かど並みだつた。「椎しひの木松浦きまつうら」のあつた昔は暫しばらく問はず、「江戸の横網よこあみ鶯うらの

鳴く」と北原白秋氏の歌つた本所さへ今ではもう「歴史的
 おほかははた
 大川端」に変わってしまったと言ふ外はない。如何に万法は流
 転するとはいへ、かういふ変化の絶え間ない都会は世界中にも珍
 らしいであらう。

僕等はいつか工事場らしい板囲ひの前を通りかかった。そこ
 にも労働者が二三人、せつせと槌を動かしながら、大きい花崗
 石を削つてゐた。のみならず工事中の鉄橋さへ泥濁りに濁つた
 大川の上へ長々と橋梁を横たへてゐた。僕はこの橋の名前は勿
 論、この橋の出来る話も聞いたことはなかつた。震災は僕等の後
 にある「富士見の渡し」を滅してしまつた。が、その代りに僕等
 の前に新しい鉄橋を造らうとしてゐる。……

「これは何といふ橋ですか？」

麦藁帽を冠つた労働者の一人は矢張り槌を動かしたまま、ちよ

つと僕の顔を見上げ、存外親切に返事をした。

「これですか？　これは蔵前橋です。」

「一銭蒸汽」

僕等はそのから引き返して川蒸汽の客になる為に横網の浮

き棧橋へおりて行つた。昔はこの川蒸汽も一銭蒸汽と呼んだも

のである。今はもう賃銭も一銭ではない。しかし五銭出しさへす

れば、何区でも勝手に行かれるのである。けれども屋根のある浮

き棧橋は——震災は勿論この浮き棧橋も炎にして空へ立ち昇らせ
たのであらう。が、一見した所は明治時代に変つてゐない。僕等
はベンチに腰をおろし、一本の巻煙草に火をつけながら、川蒸汽
の来るのを待つことにした。「石垣にはもう苔が生えてゐますね
もつとも震災以来四五年になるが、……」

僕はふとこんなことを言ひ、O君の為に笑はれたりした。

「苔の生えるのは当り前であります。」

おほかは

大川は前にも書いたやうに一面に泥濁りに濁つてゐる。そ

れから大きい浚渫船が一艘起重機を擡げた向う河岸も勿論

「首尾の松」や土蔵の多い昔の「一番堀」や「二番堀」では

ない。最後に川の上を通る船も今では小蒸汽や達磨船である。

五ご大だい力りき、高たか瀬せ船ね、伝てん馬ま、荷に足たり、田た船ふねなどといふ大小の和船もいつの間にか流る転てんの力に押し流されたのであらう。僕は〇君と話しながら、「沅げん湘しやう日にち夜や東ひがしに流れて去る」といふ支那人の詩を思ひ出した。かういふ大都會の中の川は沅げん湘しやうのやうに悠々と時代を超越してゐることは出来ない。現げん世せいは實おほに大川さへ刻々に工業化してゐるのである。

しかしこの浮き棧橋の上に川蒸氣を待つてゐる人々は大たい抵てい大川よりも保守的である。僕は巻煙草をふかしながら、唐たう棧ざん柄がらの着物を着た男や銀杏返いて返しふに結ゆつた女を眺め、何か矛盾に近いものを感じない訣わけには行ゆかなかつた。同時に又明治時代にめぐり合つた或懐しみに近いものを感じない訣わけには行ゆかなかつた。そこへ下

流から漕いで来たのは久振りに見る五大力である。艦の高い
 五大力の上には鉢巻をした船頭が一人一丈余りの櫓を押して
 た。それからお上さんらしい女が一人御亭主に負けずに竿を差
 してゐた。かういふ水上生活者の夫婦位妙に僕等にも抒情詩め
 いた心もちを起させるものは少ないかも知れない。僕はこの五大
 力を見送りながら、——その又五大力の上にある四五歳の男の子
 を見送りながら、幾分か彼等の幸福を羨みたい気さへ起してゐた。
 両国橋をくぐつて来た川蒸汽はやつと浮き棧橋へ横着けに
 なつた。「隅田丸三十号」(?)——僕は或はこの小蒸汽に何
 度も前に乗つてゐるのであらう。兎に角これも明治時代に変つて
 るないことは確かである。川蒸汽の中は満員だつた上、立つてゐ

る客も少くない。僕等はやむを得ず舟ふねばたに立ち、薄日うすびの光に照らされた兩岸の景色を見て行くことにした。尤も船ふねばたに立つてゐたのは僕等二人に限つた訣わけではない。僕等の前には夏なつ外ぐわい套いたうを着た、顚あごひげ髯ひげの長い老人さへやはり船ふねばたに立つてゐたのである。

川蒸気は静かに動き出した。すると大勢おほぜいの客の中に忽ち「毎度御やかましようございますが」と甲かんだか高い声を出しはじめたのは絵葉書や雑誌を売る商人である。これも亦また昔まに變つてゐない。若し少しでも變つてゐるとすれば、「何なにごとごとも活動はきばやりの世の中でございますから」などと云ふ言葉を挾はさんでゐることであらう。僕はまだ小学時代からかう云ふ商人の売つてゐるものを一度も買

つた覚えはない。が、天窓てんまど越しに彼の姿を見おろし、ふと僕の小学時代に伯母をばと一しよに川蒸気へ乗った時のことを思ひ出した。

乗り継ぎ「一銭蒸気」

僕等はその時にどこへ行つたのか、兎とに角伯母かくをばだけは長命寺ちやうめいじの桜餅しりめをひとかごひざ一籠膝ひとかごひざにしてゐた。すると男女の客ふたりが二人、僕等の顔を尻目しりめにかけながら、「何か匀ひますね」「うん、糞くそくさ臭くそくさいな」などと話しはじめた。長命寺の桜餅を糞臭いとは、——僕は未だいまに生意気なまいきにもこの二人を田舎者ゐなかもめと軽蔑したことを覚えてゐる。長命寺にも震災以来一度も足を入れたことはない。それから長命

寺の桜餅は、——勿論今でも昔のやうに評判の善いことは確かである。しかし餡あんや皮にあつた野趣やしゆだけはいつか失はれてしまった。

……

川蒸気は蔵前橋くらまへばしの下をくぐり、廐橋うまやばしへ真直まつすぐに進んで行つた。そこへ向うから僕等の乗つたのとあまり変らない川蒸気が一艘や矢張り浪なみを蹴つて近づき出した。が、七八間隔てんててすれ違つたのを見ると、この川蒸気の後部には甲板かんばんの上に天幕テントを張り、ちやんと大川おほかはの兩岸の景色を見渡せる設備も整つてゐた。かういふ古風な川蒸気も亦また目まぐるしい時代の影響を蒙かうむらない訣わけには行かないらしい。その後あとへ向うから走つて来たのはお客や芸者を乗せたモオタアボオトである。屋根船や船宿ふなやどを知つてゐる老人達

は定めしこのモオタアボオトに苦々しい顔をすることであらう。にがにが

僕は江戸趣味に随喜する者ではない。従つて又モオタアボオトを

ぶふうりう

無風流と思ふ者ではない。しかし僕の小学時代に大川に浪を立

てるものは「一銭蒸汽」のあるだけだつた。或はその外ほかに利根川

通ひの外輪船ぐわいりんせんのあるだけだつた。僕は渡し舟に乗る度に「一

銭蒸汽」の浪の来ることを、——このうねうねした浪の為に舟の

揺れることを恐れたものである。しかし今日こんにちの大川の上に大小

の浪を残すものは一々数へるのに耐へないであらう。

僕は船端ふなばたに立つたまま、鼠色に輝いた川の上を見渡し、確か

広重ひろしげも描いてゐた河童かっぱのことを思ひ出した。河童は明治時代に

は、——少くとも「御維新ごゐしん」前後には大根河岸だいこんがしの川にさへ出沒し

てゐた。僕の母の話に依れば、くわんせいじんみち観世新路に住んでゐた或男やもめの植木屋とかは子供のおしめを洗つてゐるうちにだいこんがし大根河岸の川の河童にわき腋の下をくすぐられたと言ふことである。（観世新路に植木屋の住んでゐたことさへ僕等にはもう不思議である。）まして大川にゐた河童の数は決して少くはなかつたであらう。いや、必しも河童ばかりではない。僕の父の友人の一人はひとり夜網よあみを打ちにかならず出てゐたところ、何かとも舐あがへ上つたのを見ると、甲羅かからだけでもたらひ盪たどあるすつぽんだつたなどと話してゐた。僕は勿論かういふ話ことごとをことごと尽く事実とは思つてゐない。けれども明治時代——或は明治時代以前の人々はこれ等の怪物をもくげき目撃する程この町まちなか中なを流れる川に詩的恐怖を持つてゐたのであらう。

「今ではもう河童かつぼもゐないでせう。」

「かう泥だの油だの一面に流れてゐるのではね。——しかしこの橋の下あたりには年を取つた河童の夫婦が二匹いま未だに住んでゐるかも知れません。」

川蒸汽は僕等の話の中にうち廐橋うまやばしの下へはひつて行つた。薄暗い橋の下だけは浪の色もさすがに蒼あをんでゐた。僕は昔は渡し舟へ乗ると、——いや、時には橋を渡る時さへ、磯いそくさ臭におひい匂におひのしたことを思ひ出した。しかし今こんにち日の大川の水は何なんの匂におひも持つてゐない。若し又持つてゐるとすれば、唯泥臭い匂におひだけであらう。……

「あの橋は今度出来る駒形橋こまかたばしですね？」

○君は生憎あいにく僕ぼくの問に答へることは出来なかつた。駒形こまかたは僕

の小学時代には大抵たいてい「コマカタ」と呼んでゐたものである。が、それもとうの昔に「コマガタ」と発音するやうになつてしまつた。「君は今駒こまかた形あたりほとゝぎす」を作つた遊女も或は「コマカタ」と澄んだ音を「ほとゝぎす」の声に響かせたかつたかも知れない。支那人は「文章は千古の事」と言つた。が、文章もおのづから勻を失つてしまふことは大川の水に変わらないのである。

柳島

僕等は川蒸気を下りて吾妻橋あづまばしの袂たもとへ出、そこへ来合せた円タクに乗つて柳島やなぎしまへ向ふことにした。この吾妻橋から柳島へ至

る電車道は前後に二三度しか通つた覚えはない。まして電車の通らない前には一度も通つたことはなかつたであらう。一度も？——若し一度でも通つたとすれば、それは僕の小学時代に業平橋かどこかにあつた或可也かなり大きい寺へ葬式に行つた時だけである。僕はその葬式の帰りに確か父に「御維新ごゐしん」前の本所ほんじよの話をして貰つた。父は往來わうらいの左右を見ながら、「昔はここいらは原ばかりだつた」とか「何とか様なんさまの裏の田には鶴が下りたものだ」とか話してゐた。しかしそれ等の話の中でも最も僕を動かしたものは「御維新」前には行き倒れとか首縊りくびくくとかの死骸を早桶はやをけに入いれ、その又早桶を葭簀よしずに包んだ上、白張りの提灯ちやうちんを一本立てて原の中に据すゑて置くと云ふ話だつた。僕は草原くさはらの中に立つた

白張の提灯を想像し、何か気味の悪い美しさを感じた。しかも彼かれこれこれまよなまよなか

是これ真夜中になると、その早桶のおのづからごろりと転まげるといふに至つては、——明治時代の本所はたとひ草原には乏ありかたつたにもせよ、恐らくまだこのあたりは多少いはゆる所謂「御朱引き外」の面おもかけをとどめてゐたのであらう。しかし今はどこを見ても、唯電柱やバラツクの押し合ひへし合ひしてゐるだけである。僕は泥のはねかかつたタクシイの窓越しに往わう来らいを見ながら、金錢を武器にする修羅界しゆらかいの空気を憂鬱ゆううつに感じるばかりだつた。

僕等は「橋本」はしもとの前で円タクをおり、水のどす黒い掘割り伝かめろどひに亀井戸てんじんさまの天神様へ行つて見ることにした。名高い柳やなぎしま島の「橋本」も今は食堂に變つてゐる。尤ももつとこの家は焼けずにすん

だらしい。現に古風な家の一部や荒れ果てた庭なども残つてゐる。けれども磨すり硝子ガラスへ緑いろに「食堂」と書いた軒燈けんとうは少くとも僕にははかなかつた。僕は勿論「橋本」の料理を云々うんぬんするほどの通人つうじんではない。のみならず「橋本」へ来たことさへあるかはいかかわからない位である。が、五代目菊五郎きくごろうの最初の脳溢血なういつけつを起したのは確かこの「橋本」の二階だつたであらう。

掘割りを隔てた妙見様めうけんさまも今ではもうすっかり裸になつてゐる。それから掘割りに沿うた往來わうらいも、——僕は中学時代に蕪村句集ぶそんを読み、「君行くや柳緑に路長し」といふ句に出合つた時、この往來にあつた柳を思ひ出さずにはゐられなかつた。しかし今僕等の歩いてゐるのは有田ありたドラツグや愛聖館あいせいくわんの並んだ、せせこま

しいなりに賑かな往来である。近頃私娼ししやうの多いとか云ふのも恐らくはこの往来の裏あたりであらう。僕は浅草千束町あさくさせんぞくまちにまだ私娼の多かつた頃の夜よるの景色を覚えてゐる。それは窓ごとに火ほかげのさした十二階の聳えてゐる為に殆ど荘嚴ほとんな氣のするものだった。が、この往来はどちらへ抜けても、ボオドレエルの色彩などは全然見つからないのに違ひない。たとひデカダンスの詩人だつたとしても、僕は決してかう云ふ町裏を徘徊はいくわいする氣にはならなかつたであらう。けれども明治時代の諷刺詩人ふうししじん、斎藤緑雨さいとうりよくうは十二階に悪趣味そのものを見出しいだしてゐた。すると明みやう日にちの詩人たちは有田ドラツグや愛聖館にも彼等自身の「悪の花」を——或は又「善の花」を歌ひ上げることになるかも知れない。

萩寺あたり

僕は碌ろくでもないことを考へながら、ふと愛あい聖せい館くわんの掲けい示じ板ばんを見上げた。するとそこに書いてあるのは確かかういふ言葉だった。

「神様はこんなにくさんの人間をお造りになりました。ですから人間を愛していらつしやいます。」

産児制限論者は勿論、現げん世せいの人々はかういふ言葉に微笑しない訣わけにはゆかないであらう。人口過剰に苦しんでゐる僕等はこんなにくさんの人間のあることを神の愛の証しょうこ拠こと思ふことは出

来ない。いや、寧ろ全能の主の憎しみの証拠とさへ思はれるであらう。しかし本所の或場末の小学生を教育してゐる僕の旧友の言葉に依れば、少くともその界限に住んでゐる人々は子供の数の多い家ほど反つて暮らしも楽だと云ふことである。それは又どの家の子供も兎に角十か十一になると、それぞれ子供なりに一日の賃金を稼いで来るからだと言ふことである。愛聖館の掲示板にかういふ言葉を書いた人は或はこの事実を知らなかつたかも知れない。が、確かにかういふ言葉は現世の本所の或場末に生活してゐる人々の気持ちを代辯することになつてゐるであらう。尤も子供の多い程暮らしも楽だといふことは子供自身には仕合せかどうか、多少の疑問のあることは事実である。

それから僕等は通りがかりにちよつと菥寺はぎでらを見物した。菥寺

も突つかひ棒はしてあるものの、幸ひ震災に焼けずにすんだらし

い。けれども菥の四五株しかない上、落合直文おちあひなほぶみ先生の石碑を

前にした古池の水も渴かれ渴がれになつてゐるのは哀れだつた。ただ

この古池に臨んだ茶室だけは昔よりも一層もの寂さびてゐる。僕は

菥寺の門を出ながら、昔は本所ほんじよの猿江さるえにあつた僕の家ぼだいじの菩提寺

を思ひ出した。この寺には何なんでも司馬江漢しばかうかんや小林平八郎こばやしへいはちらうの墓

の外ほかに名高い浦里時次郎うらざとときじろうの比翼塚ひよくづかも残つてゐたものである。

僕の司馬江漢を知つたのは勿論余り古いことではない。しかし義

士の討入りの夜よに両刀を揮ふるつて鬪つた振り袖姿の小林平八郎は小

学時代の僕等には実に英雄そのものだつた。それから浦里時次郎

も、——僕はあらゆる東京人のやうに芝居には悪縁の深いものである。従つて矢張り小学時代から浦里時次郎を尊敬してゐた。

(けれども正直に白状すれば、はじめて浦里時次郎を舞台の上に見物した時、僕の恋愛を感じたものは浦里よりも寧ろ禿だつた。)

この寺は——慈眼寺といふ日蓮宗の寺は震災よりも何年か前に染井の墓地のあたりに移転してゐる。彼等の墓も寺と一しよに定めし同じ土地に移転してゐるであらう。が、あのじめくした猿江の墓地は未だに僕の記憶に残つてゐる。就中薄い水苔のついた小林平八郎の墓の前に曼珠沙華の赤々と咲いてゐた景色は明治時代の本所以外に見ることの出来ないものだつたかも知れない。

萩寺はぎでらの先にある電柱（？）は「亀井戸天神近道」といふペ
ンキ塗りの道標だうへうを示してゐた。僕等はその横町よこちやうを曲り、待
合ちあひやカフエの軒を並べた、狭苦しい往來わうらいを歩いて行つた。が、
肝腎かんじんの天神様へは容易よういに出ることも出来なかつた。すると道ば
たに女の子が一人ひとりメリンスの袂たもとを翻しながら、傍若無人ばうじやくぶじんにゴ
ム毬まりをついてゐた。

「天神様へはどう行きますか？」

「あつち。」

女の子は僕等に返事をした後のち、聞えよがしにこんなことを言つ
た。

「みんな天神様のことばかり訊きくのね。」

僕はちよつと忌々^{いまいま}しきを感じ、この如何^{いか}にもこましやくれた十^{とを}ばかりの女の子を振り返つた。しかし彼女は側目^{わきめ}も振らずに（しかも僕に見られてゐることをはつきり承知してゐながら）矢^や張り毬^{まり}をつき続けてゐた。實際支那人の言つたやうに「変らざるものよりして之を見れば」何ごとも変らないのに違ひない。僕も亦^{また}僕の小学時代には鉄^{てつ}面皮^{めんぴ}にも生^{きぐすり}薬屋^やへ行つて「半紙^{はんし}を下さ

い」などと言つたものだつた。

「天神様」

僕等は門並^{かどな}みの待^{まち}合^{あひ}の間^{あひだ}をやつと「天神^{てんじん}様^{さま}」の裏門^{たど}へ辿り

ついた。するとその門の中には夏外套を着た男が一人、何か滔々としやべりながら、「お立ち合ひ」の人々へ小さい法律書売りつけてゐた。僕は彼の雄辯に辟易せずにはゐられなかつた。がこの人ごみを通りこすと、今度は背広を着た男が一人最新化学応用の目薬めぐすりと云ふものを売りつけてゐた。この「天神様」の裏の広場も僕の小学時代にはなかつたものである。しかし広場の出来た後にもここにかかる見世物小屋は活き人形みせものごやや「からくり」ばかりだつた。

「こつちは法律はふりつ、向うは化学——ですな。」

「亀井戸も科学の世界になつたのでせう。」

僕等はこんなことを話し合ひながら、久しぶりに「天神様」へ

お詣りに行つた。「天神様」の拝殿は仕合せにも昔に變つてゐない。いや、昔に變つてゐないのは筆塚ふでづかや石の牛も同じことである。僕は僕の小学時代に古い筆を何本も筆塚へ納めたことを思ひ出した。(が、僕の字は何年たつても、一向いつかう上達する容子ようすはない。)それから又石の牛の額へ錢を投げてのせることに苦心したことも思ひ出した。かう云ふ時に投げる錢は今のやうに一錢銅貨ではない。大抵たいていは五厘錢か寛永通宝くわんえいつうほうである。その又穴錢あなせんの中の文錢ぶんせんを集め、所謂いはゆる「文錢の指環ゆびわ」を拵こしらへたのも何年前まへの流行であらう。僕等は拝殿の前へ立ち止まり、ちよつと帽をとつてお時宜じぎをした。

「太鼓橋たいこばしも昔の通りですか？」

「ええ、——しかしこんな小さな小さかつたかな。」

「子供の時に大きいと思つたものは存ぞんぐわい外わいあとでは小さいものですね。」

「それは太鼓橋たいこばしばかりぢやないかも知れない。」

僕等は暖簾のれんをかけた掛け茶屋越しにどんより水光りのする池を見ながら、やつと短い花房を垂らした藤ふぢ棚だなの下を歩いて行つた。

この掛け茶屋や藤棚もやはり昔に變つてゐない。しかし木の下や池のほとりに古人の句碑の立つてゐるのは僕には何か時代錯誤を感じさせない訣わけには行ゆかなかつた。江戸時代に興つた「風流」は江戸時代と一しよに滅んでしまつた。唯僕等の明治時代はまだどこかに二百年間の「風流」の勻にほひを残してゐた。けれども今は目のま

あたりに、——〇君はにやにや笑ひながら、恐らくは君自身は無意識に僕にこの矛盾を指し示した。

「カルシウム煎餅も売つてゐますね。」

「ああ、あの大きい句碑の前にね。——それでもまだ張り子の亀の子は売つてゐる。」

僕等は、「天神様」の外へ出た後、「船橋屋」の葛餅を食ふ相談をした。が、本所に疎遠になつた僕には「船橋屋」も容易に見つからなかつた。僕はやむを得ず荒物屋の前に水を撒いてゐたお上さんに田舎者らしい質問をした。それから花柳病の医院の前をやつと又船橋屋へ辿り着いた。船橋屋も家は新たになつたものの、大体は昔に變つてゐない。僕等は縁台に腰をお

ろし、鴨居かもゐの上にかけて並べた日本アルプスの写真を見ながら、葛餅ひとぼんを一盆ひとぼんづつ食ふことにした。

「安いものですね、十銭とは。」

とぼん
〇君は大いに感心してゐた。しかし僕の中学時代には葛餅ひも一盆ひとぼん三銭だつた。僕は僕の友だちと一しよに江東梅園かうとうばいゑんなどへ

遠足に行つた歸りに度たびこの葛餅を食つたものである。江東梅

園ぐわりゆうばいも臥龍梅すゐでんと一しよに滅びてしまつてゐるであらう。水田

や榛はんの木かめんどのあつた亀井戸はかう云ふ梅の名所だつた為に南画なんぐわら

しい趣おもむきを具へてゐた。が、今は船橋屋の前も広い新開の往來わうらいの

向うに二階建の商店が何軒も軒を並べてゐる。……

錦糸堀

僕は天神橋の袂から又円タクに乗ることにした。この界限はどこを見ても、——僕はもう今昔の変化を云々するのにも退屈した。僕の目に触れるものは半ば出来上つた小公園である。或は亜鉛塀を繞らした工場である。或は又見すばらしいバラツクである。斎藤茂吉氏は何かの機会に「ものの行きとどまらめやも」と歌ひ上げた。しかし今日の本所は「ものの行き」を現してゐない。そこにあるものは震災の為に生じた「ものの飛び」に近いものである。僕は昔この辺に糧秣廠のあつたことを思ひ出し、更にその糧秣廠に火事のあつたことを思ひ出し、如

露やくによでん亦如電かならずといふ言葉の必しも誇張でないことを感じた。

僕の通かよつてゐた第三中学校も鉄筋コンクリートに變つてゐる。

僕はこの中学校へ五年の間あひがよ通ひつづけた。当時の校舎も震災の為に灰になつてしまつたのであらう。が、僕の中学時代には鼠色のペンキを塗つた二階建の木造だつた。それから校舎のまはりにはポプラアが何本かそよいでゐた。(この界かい限わいは土の瘦やせてゐる為にポプラア以外の木は育ち悪にくかつたのである。)僕はそこへ通つてゐるうちに英語や数学を覚えた外ほかにも如何いかに僕等人間の情け無いものであるかを經驗した。かう云ふのは僕の先生たちや友だちの悪わる口ぐちを言つてゐるのではない。僕等人間と云ふうちには勿論僕のこととはひつてゐるのである。たとへば僕等は或友だちを

いぢめ、彼を砂の中に生き埋めにした。僕等の彼をいぢめたのは格別理由のあつた訣わけではない。若し又理由らしいものを挙げるとすれば、唯彼の生意気なまいきだつた、——或は彼は彼自身を容易に曲まげようとしなかつたからである。僕はもう五六年ぜん前、久しぶりに彼とこの話をし、この小事件も彼の心に暗い影を落してゐるのを感じた。彼は今は揚子江やうすこうの岸に不相あひかはらず変孤独に暮らしてゐる。：

かう云ふ僕の友だちと一しよに僕の記憶に浮んで来るのは僕等を教へた先生たちである。僕はこの「繁昌はんじやう記」の中に一々そんな記憶を加へるつもりはない。けれども唯一人ひとりこの機会にスケッチしておきたいのは山田やまだ先生である。山田先生は第三中学校の剣

道部と云ふものの先生だつた。先生の剣道は封建時代の劍客けんかくに勝るとも劣らなかつたであらう。何でも先生に学んだ一人は武まぎ徳会の大会に出、相手の小手こてへ竹刀しなひを入れると、余り気合ひの烈はげしかつた為に相手の腕を一打ちに折つてしまつたとか云ふことだつた。が、僕の伝へたいのは先生の剣道のことばかりではない。先生は又食物を減じ、仙人せんじんに成る道も修行してゐた。のみならず明治時代にも不老不死の術に通じた、正真しやうじんまぎ紛まぎれの無い仙人の住んでゐることを確信してゐた。僕は不幸にも先生のやうに仙人に敬意を感じてゐない。しかし先生の鍛煉たんれんにはいつも敬意を感じてゐる。先生は或時博物学教室へ行き、そこにあつたコツプしょうこうすゐの昇汞水しょうこうすゐを水と思つて飲み干してしまつた。それを知つた博

物理学の先生は驚いて医者を迎へにやつた。医者は勿論やつて来るが早いのか、先生に吐剤とさいを飲ませようとした。けれども先生は吐剤と云ふことを知ると、自若じじやくとしてかう云ふ返事をした。

「山田次郎吉やまだじろきちは六十を越しても、まだ人様ひとさまのゐられる前でへどを吐くほど耄碌まうろくはしませぬ。どうか車を一台お呼び下さい。」

先生は何なんとか云ふ法を行ひ、とうとう医者にもかからずにしまつた。僕はこの三四年の間あひだは誰からも先生の噂を聞かない。あの面長おもながの山田先生は或はもう列仙伝れっせんでん中の人々と一しよに遊んでゐるのであらう。しかし僕は不相変あひかはらば埃臭い空気の中に、——僕等をのせた円タクは僕のそんなことを考へてゐるうちに江東橋かうとうばしを渡つて走つて行つた。

緑町、亀沢町

江東橋かうとうばしを渡つた向うもやはりバラツクばかりである。僕は円タクの窓越しあかさびに赤錆をふいた亜鉛屋根トタンだのペンキ塗りの板目はめだのを見ながら、確か明治四十三年にあつた大水おほみづのことを思ひ出した。今日こんにちの本所ほんじよは火事には会つても、洪水に会ふことはないであらう。が、その時の大水は僕の記憶に残つてゐるのでは一番水みづ嵩かさの高いものだつた。江東橋界隈かうとうばし かいわいの人々の第三中学校へ避難したのもやはりこの大水のあつた時である。僕は江東橋を越えるのにも一面みなぎに漲つた泥水の中を泳いで行ゆかなければならな

かつた。……

「実際その時は大変でしたよ。尤も僕の家などは床の上へ水は来なかつたけれども。」

「では浅い所もあつたのですね？」

「みどりちやう緑町 二丁目——かな。何でもあの辺はなん膝位まででした

がね。僕はSと云ふ友だちと一しよにその露地の奥にゐるもう一人の友だちを見舞ひに行つたんです。するとSと云ふ友だちが溝の中へ落ちてしまつてね。……」

「ああ、水が出てゐたから、溝のあることがわからなかつたんですね。」

「ええ、——しかしSのやつは膝まで水の上に出てゐたんです。」

それがあつと言ふ拍子ひやうしに可也かなり深い溝だつたと見え、水の上に出てゐるのは首だけになつてしまつたんでせう。僕は思はず笑つてしまつてね。」

僕等をのせた円タクはかう云ふ僕等の話の中にうち寿座ことしんぎざの前を通り過ぎた。画看板ゑかんばんを掲げた寿座は余り昔と変らないらしかつた。僕の父の話によれば、この辺、——二つ目通りから先は「津つ軽がる様」の屋敷だつた。「御維新ごゐしん」前まへの或年の正月、父は川向うへ年始ゆに行き、歸りにりやうごくぼし両国橋を渡つて来ると、少しも見知らなわかぎむらひい若侍ひとが一人偶然父と道づれになつた。彼もちやんと大小をさし、鷹たかの羽はの紋のついた上かみしも下を着てゐた。父は彼と話してゐるうちにいつか僕の家うちを通り過ぎてしまつた。のみならずふと氣

づいた時には「津輕様」の溝どぶの中へ転げこんでゐた。同時に又若侍はいつかどこかへ見えなくなつてゐた。父は泥まみれになつたまま、僕の家へ歸うちつて来た。何でも父の刀は鞘さや走ばしつた拍ひやう子しにさかさまに溝の中に立つたと云ふことである。それから若侍に化けた狐は（父は未いまだこの若侍を狐だつたと信じてゐる。）刀の光に恐れた為にやつと逃げ出したのだと云ふことである。實際狐の化けたかどうかは僕にはどちらでも差さ支しつかへない。僕は唯父の口からかう云ふ話を聞かされる度にいつも昔の本所ほんじよの如何いかに寂しかつたかを想像してゐた。

僕等かめざはちやうかどは亀沢町の角で円もと町まち通りを両国へ歩いて行つた。菓子屋の寿徳庵じゆとくあんは昔のやうにやはり繁はん昌じやうしてゐる

らしい。しかしその向うの質屋しちやの店は安田銀行やすだに変わつてゐる。この質屋の「利りいちちゃん」も僕の小学時代の友だちだつた。僕はいつか遊び時間に僕等の家うちにあるものを自慢じまんし合つたことを覚えてゐる。僕の友だちは僕のやうに年とつた小役人こやくにんの息子むすこばかりではない。が、誰も「利りいちちゃん」の言葉には驚嘆せずにはゐられなかつた。

「僕の家うちの土蔵どぐらうの中には大砲おほづつ万右衛門まんゑもんの化粧廻けしやうまはしもある。」
 おほづつ
 大砲おほづつは僕等の小学時代に、——常陸山ひたちやまや梅ヶ谷うめがたにの大関だつた時代に横綱を張つた相撲すまふだつた。

相生町

本所警察署もいつの間にかコンクリイトの建物に変わつてゐる。
 僕の記憶にある警察署は古い赤煉瓦の建物だつた。僕はこの警
 察署長の息子も僕の友だちだつたのを覚えてゐる。それから警察
 署の隣にある蝙蝠傘屋も——傘屋の木島さんは今日でも僕の
 ことを覚えてゐてくれるであらうか？ いや、木島さん一人では
 ない。僕はこの界隈に住んでゐた大勢の友だちを覚えてゐる。
 しかし僕の友だちは長い年月の流れるのにつれ、もう全然僕な
 どとは縁のない暮らしをしてゐるであらう。僕は四五年前の簡
 閲点呼に大紙屋の岡本さんと一しよになつた。僕の知つて
 る大紙屋は封建時代に变りのない土蔵造りの紙屋である。その

又薄暗い店の中には番頭や小僧が何人も忙しいそがさうに歩きまはつてゐた。が、岡本さんの話によれば、今では店の組織も変り、海外へ紙を輸出するのにもいろいろ計画を立ててゐるらしい。

「この辺もすつかり變つてゐますか？」

「昔からある店もありますけれども、……町全体の落ち着かなさ加減はね。」

僕はその大紙屋おほがみやのあつた「馬車通り」（「馬車通り」と云ふのは四よつ目めあたりへ通ふガタ馬車のあつた為である。）のぬかるみを思ひ出した。しかしまだ明治時代にはそこにも大紙屋のあつたやうに封建時代の影の落ちた何軒かの「しにせ」は残つてゐた。僕はこの馬車通りにあつた「魚善うをぜん」といふ肴屋さかなやを覚えてゐる。

それから又樋口さんといふ門構への医者覚えてゐる。最後にこの樋口さんの近所にピストル強盜清水定吉しみづさだきちの住んでゐたことを覚えてゐる。明治時代もあらゆる時代のやうに何人かの犯罪的天才を造り出した。ピストル強盜も稲妻強盜や五寸釘の虎吉いなづまと一しよにかう云ふ天才たちの一人ひとりだつたであらう。僕は彼の按摩あんまになつて警官の目をくらませてゐたり、彼の家の壁をがんどう返しにして出沒を自在にしてゐたことにロマン趣味を感じずにはゐられなかつた。これ等の犯罪的天才は大抵たいていは小説の主人公になり、更に又所謂さう壯士芝居いわゆるの劇中人物になつたものである。僕はかういふ壯士芝居の中に「大悪僧だいあくそう」とか云ふものを見、一場ひとば々々の血なまぐささに夜も碌ろくろく々眠られなかつた。尤もこの「大悪僧」

は或はピストル強盜のやうに実在の人物ではなかつたかも知れない。

僕等はいつか埃ほこりの色をした国技館こくぎくわんの前へ通りかかつた。国技

館は丁度ちやうど日光にづくわうの東照宮とうせうぐうの模型もけいか何かを見世物みせものにしてゐる

所らしかつた。僕の通つてゐた江東かうとう小学校は丁度ちやうどここに建つ

てゐたものである。現に残つてゐる大銀杏おほいてふも江東小学校の運動

場の隅に、——といふよりも附属幼稚園の運動場の隅に枝をのば

してゐた。当時の小学校の校長の震災の為に死んだことは前に書

いた通りである。が、僕はつい近頃やはり当時から在職してゐた

Ｔ先生にお目にかかり、女生徒に裁縫さいほうを教へてゐた或女の先生

も割り下水わげすゐに近い京極きやうごく子爵家(?)の溝どぶの中に死んだことを

知つたりした。この先生は着物は腐れ、体は骨になつてゐるもの、貯金帳だけはちやんと残つてゐた為にやつと誰だかわかつたさうである。T先生の話によれば、僕等を教へた先生たちは大抵たいは本所ほんじよにゐないらしい。僕は比留間先生ひるまに張り倒されたことを覚えてゐる。それから宗先生そうに後頭部を突かれたことを覚えてゐる。それから葉若先生はわかに、——けれども僕の覚えてゐるのはたい体罰ばつを受けたことばかりではない。僕は又この小学校の中にいろいろの喜劇のあつたことも覚えてゐる。殊に大島おほしまと云ふ僕の親友のちやんと机に向つたまま、いつかうんこをしてゐたのは喜劇中の喜劇だつた。しかしこの大島敏夫としおも——花や歌を愛してゐた江東小学校の秀才はたちも二十前後に故人になつてゐる。……

国技館の隣りに回向院のあることは大抵誰でも知つてゐるであらう。所謂本場所の相撲も亦国技館の出来ない前には回向院の境内に蓆張りの小屋をかけてゐたものである。僕等はこの義士の打ち入り以来、名高い回向院を見る為に国技館の横を曲つて行つた。が、それもここへ来る前にひそかに僕の予期してゐたやうにすつかり昔に變つてゐた。

回向院

今日の回向院はバラツクである。如何に金の紋を打つた亜鉛葺きの屋根は反つてゐても、硝子戸を立てた本堂はバラツクと

云ふ外ほかに仕かたはない。僕等は読経どきやうの声を聞きながら、やはり僕には昔馴染なじみの鼠小僧ねずみこぞうの墓を見物に行つた。墓の前には今こんに日ちでも乞食こじきが三四人集つてゐた。が、そんなことはどうでも善よい。それよりも僕を驚かしたのは膾炙をつとせい獣供養塔と云ふものの立つてゐたことである。僕はぼんやりこの石碑を見上げ、何かその奥の鼠小僧の墓に同情しない訣わけには行ゆかなかつた。

ねずみこぞうぢろだいふ

たてふだ

鼠小僧治郎太夫の墓は建札たてふだも示してゐる通り、震災の火事にも滅びなかつた。赤い提灯ちやうちんや蠟燭らふそくや教覚けうかく速善居士そくぜんこじの額がくも大体昔の通りである。尤も今は墓の石を欠かれない用心もつとのしであるばかりではない。墓の前の柱にちやんと「御用のおかたにはお守り石まもをさし上げます」と書いた、小さい紙札も貼はりつけて

ある。僕等はこの墓を後ろにし、今度は又墓地の奥に、——国技館の後ろにある京伝きやうでんの墓を尋ねて行つた。

この墓地も僕にはなつかしかつた。僕は僕の友だちと一しよに度たびいたづらに石塔を倒し、寺男や坊さんに追ひかけられたものである。尤も昔は樹木じゆもくも茂り、一口に墓地と云ふよりも卵塔ふぼ場と云ふ氣のしたものだつた。が、今は墓石ぼせきは勿論もちろん、墓を繞めぐつた鉄柵てつさくにも凄まじい火の痕あとは残つてゐる。僕は「水子塚みづこづか」の前を曲り、京伝きやうでんの墓の前へ辿たどり着いた。京伝の墓も京山きやうざんの墓と一しよにやはり昔に變つてゐない。唯それ等の墓の前に柿か何かの若木が一本、ひよろりと枝をのばしたまま、若葉を開いてゐるのは哀れだつた。

僕等は回向院ゑかうゐんの表門を出、これもバラツクになつた坊主軍鶏ぼうずじやもを見ながら、一つ目ひとめの橋へ歩いて行つた。僕の記憶を信ずるとすれば、この一つ目の橋のあたりは大正時代にも幾分か広重ひろしげらしい画趣を持つてゐたものである。しかしもう今日こんにちではどこにもそんな景色は残つてゐない。僕等は無慙むざんにもひろげられた路みちを向う両国りやうこくへ引き返しながら、偶然「泰ちやん」の家うちの前を通りかかつた。「泰ちやん」は下駄屋げたやの息子むすこである。僕は僕の小学時代にも作文は多少上じやうず手てだつた。が、僕の作文は、——と云ふよりも僕等の作文は、大抵たいていは所謂いはゆる美文だつた。「富士の峯白くかりがね池おもてくたの面に下り、空仰げば月麗うるはしく、余が影法師黒し。」——これは僕の作文ではない。二三年前まへに故人になつた僕の小学

時代の友だちの一人、——清水昌彦君の作文である。「泰ちやん」はかう云ふ作文の中にひとり教科書の匀にほひのない、活き活きした口語文を作つてゐた。それは何でも「虹」といふ作文の題の出た時である。僕は内心僕の作文の一番なることを信じてゐた。が、先生の一番にしたのは「泰ちゃん」——下駄屋「伊勢甚いせじん」の息子木村泰助君の作文だつた。「泰ちゃん」は先生の命令を受け、彼自身の作文を朗読らうどくした。それは恐らくは誰よりも僕を動かさずにはおかなかつた。僕は勿論「泰ちゃん」の為に見事に敗北を受けたことを感じた。同時に又「泰ちゃん」の描いた「虹」にありありと夕立ちの通り過ぎたのを感じた。僕を動かした文章は東西に亘わたつて少くはない。しかしまづ僕を動かしたのはこの

「泰ちやん」の作文である。運命は僕を売文の徒にした。若し

「泰ちやん」も僕のやうにペンを執つてゐたとすれば、「大東京

繁昌記」の読者はこの「本所両国」よりも或は数等美し

い印象記を読んでゐたかも知れない。けれども「泰ちやん」はど

うしてゐるであらう？ 僕は幾つも下駄の並んだ飾り窓の前に佇

んだまま、そつと店の中へ目を移した。店の中には「泰ちやん」

のお母さんらしい人が一人坐つてゐる。が、木村泰助君は生憎

どこにも見えなかつた。……

方丈記

僕「今日は本所ほんじよへ行つて来ましたよ。」

父「本所もすつかり変つたな。」

母「うちの近所はどうなつてゐるえ？」

僕「どうなつてゐるつて、……釣竿屋の石井いしゐさんにうちを売つ

たでせう。あの石井さんのあるだけです。ああ、それから提ちやう

灯屋ちんやもあつた。……」

伯母をば「あすこには洗湯せんたうもあつたでせう。」

僕「今でも常磐湯ときはゆと云ふ洗湯はありますよ。」

伯母「常磐湯と言つたかしら。」

妻「あたしのゐた辺へんも変つたでせうね？」

僕「変らないのは石河岸いしがしだけだよ。」

妻「あすこにあつた、大きい柳は？」

僕「柳などは勿論焼けてしまつたさ。」

母「お前のまだ小さかつた頃には電車も通つてゐなかつたんだからね。」

父「うへの上野としんばし新橋とのあひだ間さへ鉄道馬車があつただけなんだから。——あひだ鉄道馬車と云ふ度に思ひ出すのは……」

僕「僕の小便をしてしまつた話でせう。満員の鉄道馬車に乗つたまま。……」

伯母「さうさう、赤いフランネルのズボン下をはいて、……」

父「何、あの鉄道馬車会社のかんべ神戸さんのことさ。神戸さんもこのあひだ間死んでしまつたな。」

僕「東京電燈の神戸かんべさんでせう。へええ、神戸さんを知つてゐるんですか？」

父「知つてゐるとも。大倉おほくらさんなども知つてゐたもんだ。」

僕「大倉喜八郎きはちらうをね……」

父「僕もあの時分にどうかすれば、……」

僕「もうそれだけで沢山たくさんですよ。」

伯母「さうだね。この上損でもされてゐた日には……」（笑ふ）

僕「『榛はんの木馬場きまば』あたりはかたなしですね。」

父「あすこには葛飾かつしかほくさい北斎ほくさいが住んでゐたことがある。」

僕「『割わり下水げすゐ』もやつぱり變つてしまひましたよ。」

母「あすこには悪御家人わるごけにんが沢山たくさんゐてね。」

僕「僕の覚えてゐる時分でも何かそんな気のする所でしたね。」

妻「お鶴つるさんの家うちはどうなつたでせう？」

僕「お鶴さん？ ああ、あの藍問屋あんどんやの娘さんか。」

妻「ええ、兄にいさんの好きだつた人。」

僕「あの家うちどうだつたかな。兄さんの為にも見て来るんだつけ。

尤もつとも前は通つたんだけれども。」

伯母「あたしは地震の年以來一度も行つたことはないんだから、

——行つても驚くだらうけれども。」

僕「それは驚くだけです。伯母おばさんには見当けんたうもつかないか

も知れない。」

父「何しろ変りも変つたからね。そら、昔は夕がたになると、

みんな門を細目ほそめにあけて往來わうらいを見てゐたもんだらう？」

母「法界節ほふかいぶしや何かの帰つて来るのをね。」

伯母「あの時分は蝙蝠かうもりも沢山たくさんゐたでせう。」

僕「今は雀さへ飛んでゐませんよ。僕は實際無常むじやうを感じてね。

……それでも一度行つてごらんさい。まだずんずん変らうとしてゐるから。」

妻「わたしは一度子供たちに亀井戸かめゐどの太鼓橋たいこばしを見せてやりた

い。」

父「臥龍梅ぐわりゆうばいはもうなくなつたんだらうな？」

僕「ええ、あれはもうとうに。……さあ、これから驚いたと云ふことを十五回だけ書かなければならない。」

妻「驚いた、驚いたと書いてるれば善いのに。」（笑ふ）

僕「その外ほかに何も書けるもんか。若し何か書けるとすれば、：
：さうだ。このポケット本の中にちやんともう誰か書き尽してゐ
る。——『玉敷たましきの都の中に、棟を並べむね、葺いらを争へる、尊たかき卑いやしき
人の住居すまひは、代々よよを経てつきせぬものなれど、これをまことかと
尋たづねれば、昔ありし家は稀まれなり。……いにしへ見し人は、二三十
人が中に、僅ひとりふたりに一人二人なり。朝あしたに死し、夕ゆふべに生まるるならひ、
ただ水の泡あわにぞ似たりける。知らず、生れ死ぬる人、何方いづかたより
来りて、何方いづかたへか去る。』……」

母「何だえ、それは？ 『お文様ふみさま』のやうぢやないか？」

僕「これですか？ これは『方丈記ほうぢやうき』ですよ。僕などよりも

ちよつと偉かつた鴨かもの長ちやうめい明と云ふ人の書いた本ですよ。」

(昭和二年五月)

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集 第四卷」筑摩書房

1971（昭和46）年6月5日初版第1刷発行

1971（昭和46）年10月5日初版第5刷発行

初出：「東京日日新聞」

1927（昭和2）年5、6月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：j.ujiyama

校正：もりみつじゅんじ

1999年8月23日公開

2012年3月22日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

本所両国

芥川龍之介

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>